小　径

東南アジアのイスラム

第三経営経済研究部長　　川崎　泰史

経済協力関係の仕事で７～８年前にジャカルタで生活した。インドネシアは国民の８割以上がイスラム教徒の国、人口規模では世界最大のイスラム人口を抱えている。毎日、明け方と夕刻にはモスク（イスラム寺院）のスピーカーからコーランが大音声で流れてくる。

先般のバリ島での爆弾テロによりイスラム過激派の活動が心配されているが、東南アジアのイスラムは全体として温和で柔軟、開放的な印象がある。服装をみても、街を行きかう女性は先進国と同じ活動的なファッションをしている。イスラムらしく頭にスカーフをかぶっている場合も白が基本となっており、それ以外にも南国らしくカラフルな色にあふれている。

海外からの文化の流入には寛容だ。日本発のものをあげると、テレビではドラエモンやセーラームーンなどのアニメはもとより、トレンディードラマもインドネシア語に吹き替えて放送していた。日本の漫画は数多く翻訳されて書店に並んでいる。味の素が豚の成分を使っていると大問題になったのはそれだけ普及しているからであり、ヤクルトおばさんもいる。また、当時は日本でもインターネットがまだ始まったばかりだったが、インドネシアでも学生ベンチャーによるプロバイダーがサービスを始めたところで、日本との連絡に高い国際電話をバイパスして電子メイルを使えたのには重宝した。

その一方で、東南アジアのイスラムが敬虔でないということはない。秘書が見当たらないなと思ったら、１日５回のお祈りの時間だ。断食明けにはハジ（メッカへの巡礼）に向かう人で空港はあふれており、多くの人がこれを人生の最高の目標にしている。巡礼から帰った人は、犠牲祭の日に羊や牛を生け贄としてささげ、貧しい人達に分け与える。

歴史的に東南アジアはヒンズー、仏教、イスラムなどが順々に押し寄せてきた地域で、様々な文化が重畳的に積み重なっている。インドネシアの場合は、イスラム教、仏教、キリスト教、ヒンズー教のいずれかを信仰するようになっており、祝祭日は元旦と独立記念日以外にこれらの４大宗教に関連した日があてられている。アジア通貨危機以降、経済・社会が混迷するインドネシアでは分離独立運動が目立っているが、多数民族のジャワ語ではなく平易なインドネシア語を国語に採用し、「多様性の中の統一」を国是としてきた国であり、様々な文化の共存がうまくいっているというのが当時の印象であった。

イスラムは数学が発達したことにみられるように、もともとは現実的な宗教である。禁酒の教えも、「酒を飲んで酔っぱらってはいけない」というのが本来の趣旨であると聞いた。多様性の歴史のある東南アジアのイスラムから、文明の衝突を克服する新しい知恵が生まれてくればと思う。